

脳を知りたい！

著者：野村進



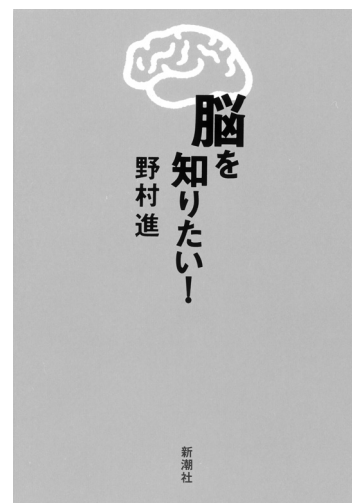
曙クリニック 玉井 修

著者の野村進氏は医療関係の方ではなく、この本は専門用語を出来るだけ使用しない脳研究の本です。2001年に書かれたものなので、その後の脳研究の進歩具合から見ても精神科や脳外科の先生方からみればこの本の内容に関してはあまり興味をそそられないかも知れません。しかし、この本の真骨頂はその様な学術的脳研究の詳細な解説ではないと思われます。自然科学の解説に徹底出来なかった著者の視線が、脳科学の行間を埋めていく様な気がします。むしろ徹頭徹尾自然科学の解説書として書こうとしていない部分が何ととっても面白い。例えば脳と早期教育という章の中では、人間の脳は約3歳でその発達の最も重要な方向付けがなされ、胎教に始まる早期教育がいかにより多くの天才児を生んでいるかという現実を紹介しつゝ、しかし、小学校入学前に高等数学を理解した脳を持つ子供はその後どの様な人生を辿っていたか。そのまま、超天才児として順風満帆な人生を歩んでいったかという疑問が生じます。現実には多くの早熟天才児は人格形成のチャンスが早期教育の中で奪われ、依存症や自殺に繋がっているといひます。子供の可能性は無限だという定説にも著者は異を唱えます。限られた子供時代に何を学ぶべきか、それは情緒の成長に欠かすことの出来ない時代でもあるのです。親に脅迫された詰め込み型の早期教育が、子供の心を蝕んでいる現状を細かくレポートしています。胎教などと言ひながら、妊娠中の母親がお腹の赤ちゃんに日本地図を指さしながらここが北海道よ、などつつぶやく姿は滑稽でもあり、恐ろしくもあります。

別の章では視覚と脳について書かれています。先天性白内障で生まれつき目の見えなかった15歳の少女は、手術で初めて視覚を取り戻

す開眼手術を受けて目が見えるようになりました。初めて外界を見たときに彼女は喜びのあまり、涙を流したか？いや、現実には、ものが見えることの戸惑いでしばらく日常生活に支障が出てしまったのです。影が異物に見えて、跨いだり。閉じたはさみと開いたはさみが同じはさみだとは認識できなかつたり、視覚が事象の認知に不可欠ではないことを物語っています。見えるという事は確かに大切な感覚ではありますが、見えないことで人は不幸になるわけではない。この章の最後にその開眼手術後30数年経過した後のその人の言葉が興味深い。「負け惜しみみたいに聞こえるかもしれないけど、見える人のことをそんなにうらやましいとは思わないんですよ...中略...見たくないものでも見えてしまうこともあるでしょう。」

脳に関する自然科学を解説している本と思って読んでいたら、実際には心について深く考えさせられ、幸福とは何なのかをもう一度考えさせられる本でありました。あくまでも優しく、温かな文章のタッチが爽快な読後感を与えてくれます。



脳を知りたい！ 野村進 新潮社